火曜１限　社会Ⅰ　シケプリ

＃０　introduction

〈近いがゆえに遠いもの〉

　ヘーゲル→「見知られている」≠「認識されている」(見知られたものは認識の対象となりにくい)

　ハイデガー→「見知られたもの」を「認識する」

〈見知られたものを認識するとは〉

●パウダン族の美人を見たとき、我々は“美人”と思うか？

　我々が見知れたもの（bekannt）＝現代日本人の美人

　　→あまりに近くにあるがゆえにその存在がわからない

「パウダン族」の美人を見るとわれわれは違和感を抱く。しかし「現代日本の美人」にも「パウダン族」の美人にも美人を作り出す**ある力**が存在する。

* 纏足を作り上げる力とハイヒールを履くという行為（→現代日本の美人の行為）には同じ力が働いている。

→その力に気づくとbekannt/ベカントなもの(＝見知れたもの)が認識される

**⇒我々が自明視してるものの中に社会的事実を見つける＝社会学**

* 摂食障害と女性

「痩せる」→美を求めている社会→摂食障害

　　⇒社会が求めているものを過剰にやってしまうover socializationの例

逆の例：女らしくならないために→社会の規範に対する抵抗の例

〈社会学的想像力〉

●デュルケーム

　“美人”を作る背後に潜む規範（ルール）は男達が作っている

　　→女性達の体を作っているのは“見えない男”たちだ！

つまり、人間の行動や思考は、個人を超越した集団や社会のしきたりや慣習などによって支配されるということである。

●ミルズ

　個人とマクロな社会をつないで考えることのできる想像力→社会学的想像力

●「外」にでる方法

ベカント/bekanntなものを認識する方法

（１）比較…纏足とハイヒールとか

（２）歴史…現在の“美人”の概念はいつ生み出されたか？

（３）実験…違背実験（日頃〈やっている／やらない〉をわざと〈やらない／やる〉）

（４）理論…例）仮に空気がないならば～、～と考えられる

　　　　　　　　本当は空気はあるが、ないと仮定して→事実と比較

＃１　社会化socializationとはなにか①

* アマラとカマラの物語

ホモサピエンスの特徴　①**直立姿勢**　②**死の観念（埋葬など）**　③**言語**

→２人には、これらがほとんどみられない

人間は、人間となる**潜在的可能性**を持って生まれてくるが、これが**顕在化するためには幼児期から他の人間と結びついていることが必要**。

このような点から、一般に、アマラとカマラは社会を知らない存在、つまり社会を知らずに育ってしまった存在として描かれることが多い。しかし本当にそうなのだろうか？

彼女たちはインドという、女性の地位がとても低い国で生まれた。インドでは、例えば、女性が結婚する場合は夫の家に持参金を持っていかなければならない。そしてそれは結婚する女性の実家にとって大きな経済負担となる。だから、そうなることを未然に防ぐため、妊娠した女性は子どもが女の子だとわかると中絶する場合が多いのである。また、もし生まれて、無事結婚したとしても、持参金が少なかったり、男の子を生まなかったりすると、その女性は夫やその家族に殺されてしまう。離婚による女性の生活費の支払い、などといった経済的負担を避けて新しい奥さんを迎えるために、である。

このようなインド社会の状況を考慮すると、**アマラとカマラが社会を知らない存在とは一概に言えなくなる**のだ。というよりも、逆に**アマラとカマラはインド社会固有の状況が生み出した存在そのものである**とすら言えるのだ。何故なら、アマラとカマラは女性の地位が低いインド社会に生まれた「女の子」たちであり、おそらくは男の子ではなかったことに失望した母親または父親が捨ててしまった子どもたちである可能性が高いからである。

　⇒「ヒト」が「人間」になるプロセスには何が存在しているのか

　　　　＝**社会化**とは何か

　　社会化の資格をはく奪された人について調べるのも社会学

* バーガー／ルックマンの分析

1. **外在化externalization**

人間の存在が、文化として外部に流出すること。

　（ここでの「内部」＝自然に決定された部分）

　具体例・人間は**未完成のまま**生まれてくる(あらかじめインプットされていない部分が多い)

　　　　・人間には生物学的に決定されている（＝自然により完成された）世界がなく、**人間の世界は人間の営みにより構成される**

1. **客体化objectivation**

未完成な部分を補うための人間活動の所産によって、生産者である人間に外在し、対立する現実が成立すること。つまり、**人間の作った世界・生活様式が「客観的な」現実となること**。

　(例)慣習、規範、ルール、法、言語

　「いったん作り出されてしまえば、この世界はたやすく望みどおりには消え去らない。」

→言語の恣意性

　例えば言語がそうである。言語は生物学的決定を超えたものだ。つまり、言語は、生物学的に今のような形でなければいけないというものではない。それにも関わらず、いったん作り出されてしまった現在、それはたやすく消えたり変えたりできないものとなっているのである。

　（例）下図はマレー語、英語、日本語の③言語による「H2O」の名称の種類を示したものである。どれも同じ「H2O」を表している言葉なのに、その言葉の種類の数は各言語で違う。そして、この違いにはその必然性は感じられない。つまり、例えば、三つに分類しなければならないという絶対的理由は全く存在しない。しかし、いったん作り出されてしまっている現在、このような言葉は簡単には消えない。これが、生産者である人間に「外在」し、対立する現実となっている、ということである。

|  |  |
| --- | --- |
| マレー語 | ayer |
| 英語 | ice | water |
| 日本語 | 氷 | 水 | 湯 |

1. **内在化internalization**

外在化、客体化で作られた文化（社会）をもう一度内的意識の中に取り込むこと。（≒社会化）客観的現実を獲得。人間が社会の所産となる

* ピアジェの発達心理学

1. **感覚行動期**（生後１８ヶ月～２歳）

　自分を取り巻くすべての実行的世界を、知覚と運動によって征服

　すべてのものを自分自身の身体のほうへ引き寄せる。

　　＝自己中心性・**世界の極としての自我**の芽生え

1. **前操作期**（２～７歳）

自己中心性が支配的。自分自身の観点から抜け出て、他人の観点からものを見ることができない。（**知的自己中心性**）

論理的思考ができない。

特徴・言語発達　・模倣　・

アニミズム的思考（一つ一つのものに魂が宿ると考える）

1. **具体的操作期**（７～１２歳）

　自分自身の観点と他人の観点を混同せずに、それらを共応させるために分離する。特徴・共同作業

1. **形式的操作期**（１２歳～）

抽象度の高い記号を用いて、処理・操作を行い、人間関係をつかさどる。

　　　※ここでいう「操作」

　　　　　…**論理的思考**（ものの見方に囚われず、数などの概念を認識）のこと

1. 感覚運動期
2. 前操作期

両者は、自分とは違う視点に立って物事を考えられるか、が差。

1. 具体的操作期

　　　　　　　　　操作期（方程式を使えるかどうかが差）

1. 形式的操作期
2. から④に向かって自己中心性が弱まっていく。

＜説明･･･＞

前操作期の子どもは人間を中心に考える。そのため物にも魂があると考える傾向にある。例えば、雨が当たっている窓を見て、「窓が泣いているよ」などと表現する場合などがそうだ（アニミズム的思考）。

また、前操作期の子どもは自己中心性が強いため、自分とは違う視点、立場で物事を理解できない。エチエンヌ兄さんのエピソードはその例である。

操作期に入った子どもは、自分とは違う観点から自身を振り返ることができるようになる。何故なら、子どもは、もはや自分自身の観点と他人の観点とを混同せずに、それらを共応させるために、分離するからだ。

このようにピアジェは、子どもは、まず自閉的な段階に始まり、続いて自己中心的な段階を経て、その後で始めて、他者を自分と対等なパートナーと認めることができるようになる、と考えた。しかしこれに対してワロンは、チャンドラの実験で明らかになった、子どもが二歳半には既に「嘘をつく」という、相手の立場にたたなければ不可能である高度な能力を示すことから、それは間違っていると考えた（子供の知的自己中心性（他人の考えていることがわからない）に矛盾していると考えた）。つまりワロンは、ピアジェが。我の自己中心性から我々が切り出されていくと考えたのに対し、我々という共同性の中から我（自己）が次第に切り出されていく、と考えたのである。

ピアジェ論･･･　子供の成長は、自閉的段階→自己中心的段階→他者を認められる段階

ワロン論･･･　自我と他者は一緒に形成される。次第に、意識の中に基本的区別が生じる。子供は周囲の人々との緊密な共同性の中に生きている。

　　　　※子供には最初自他の区別が付かないという認識では両者は共通している。

　＜レジュメの図参照＞

**自己（われ）→共同性（われわれ）**はピアジェ論：最初に自己ありき

**共同性（われわれ）→自己（われ）・他者**　はワロン論：徐々に自己と他者の区別がついてくる

コペルニクス的転回･･･カントがその「純粋理性批判」の認識論において、主観が客観に従うのではなく、逆に客観が主観に従い、主観が客観を可能にすると考えたことを、天動説から地動説へのコペルニクスの転回にたとえて自ら称した語。

まとめ

〔１〕人間は〈未完成〉のまま生まれてくるがゆえに、「自然」を超えた「文化」によって補完しながら自らの生活様式を完成させる。

外在化（バーガー/ルックマンのいうところの）

〔２〕この「文化」は、しかし他者との相互行為やコミュニケーションを媒介として伝達され、内面化される。

　　　　　　　↓

　　　　▪ 「他者」とは？

　　　　▪ 「相互行為」「コミュニケーション」とは？　　→＃２につづく

Ｇ.H.Mead(アメリカの社会心理学者・哲学者)

～自己の二重化～

＃２「社会化」とはなにか②

　◇前置き

　　　人間は未完成のまま生まれてくるがゆえに、「自然」を超えた「文化」によって

　　　補完しながら自らの生活様式を完成させる

　　　　＝「ヒト」から「人間」へというプロセス

　　　　＝社会化

　　　また、「文化」は他者との相互行為やコミュニケーションを媒介として伝達され、

　　　内面化される

* ミードの社会的自我論

self 　　　　発話　　　me･･･自己の中の他者

I me　　　身振り　　　　　社会的な自我

Selfの中に、発話・身振りによって取り

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　込まれた「他者の視点」が蓄積される。

* 自己の二重化

幼児が他人に語りかけるとき、自分自身にも語りかけている。（**有声身ぶりvocal gesture**(≠発音　speech)を使用）⇒自分（**me**）が言ったことに、自分（**I**）として反応する。

* 耳の聞こえない子供も、自分のしたこと（刺激）に対して他人がどう反応するかを、画像という形で記憶し「ｍｅ」を形成する。

↳有声身振りの一つ

「Ｉ」･･･音声を発生する私（自分）

「me」･･･音声を聞く私（自分）

レジュメ･･･「他人に語りかける過程は、自分自身にも語りかける過程であり、他人に呼び起こす反応を自分自身に呼び起こす過程である」

例：人に話をする　　相手はそれに対して反応する。しかし、そのとき、同時に自分自身も自分の耳から自分の発言を聞いている。

レジュメ･･･「幼児は～いくのである。」

このような「幼児の独り言」から、ピアジェは幼児の自己中心性を考えた。

しかし、ミードは、独り言は、自分の声がどのように聞こえているのか、相手にどのように受けとめられているのか、について確かめている、つまり「me」＝自己の中の他者を作っているのだと主張する。独り言は他者の立場に身を置くためのトレーニングだと言うのだ。このように発話は自我の二重化を引き起こす。だから発話は重要だと考えられた。しかしこれは、怒りなども含めた、視覚的に捉えられる身振りにも言えることであるため、発話と同時に、身振りも自我の二重化を引き起こすものといえる。

Ｉとmeの相互作用（interaction）がある。

* **ごっこ遊びplay**

**imput**

**役　割**

**imput**

子供同士の遊びの中で、こどもはどのように社会性を獲得するのか…？

→模倣　1人称と2人称で構成

子供は自覚的に**他人の役割を取得**する。

「me」の中に母や父、または、追いかける側や逃げる側の役割を入れる。

＝追いかける側は追いかけられる側の役割を「me」の中に同時にインプットしている。

つまり、自分だけではなく、相手の役割も「me」の中に入れるということ。

* **規則のある遊戯game**

3人称の視点が導入（多数の役割が集合）

同じプロセスに関与している人々の態度を**組織化**する⇒抽象的な他者の発見

自我の統一を与える組織化された共同体＝**一般化された他者generalized others**

＝A,B,C･･･の役割を一つにまとめ上げる抽象的なものに他者がgeneralizeされる。＝他者が抽象化される。＝一般化される他者

具体的操作期

前操作期

進化

Playの段階ではAとBという

対の中で行なわれる。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　Gameの段階では、playと違って、

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　取得する役割が二つではない。つまり

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　Playより複雑化する。

　　　　　　　　「me」の抽象化

フロイトの自我論

→非常に男性中心的。批判も多い。

　（社会）　　　　③　　　　　　　　　③

　　　　　　　　　　　　　　　　　　（家庭）

（「‘」は教授の説明の順番が①、①’という順番であっただけで、意味的には順序がないと思われる二つに用いた。）

1. 母なしではいられない、母と密着の状態
2. 母を奪い取る敵として父をみるようになる＝邪魔者

③、③’　父と和解したことによって、母とも分離＝乳離れする

　　　　そして、最初は敵対していた父（＝社会の象徴）と和解することで、家族の中から、**父に代表（体現）される社会に参入**していく。

エディプス・コンプレックス･･･

子どもが親に対して抱く**愛憎の複合的感情**（つまり、男の子どもが無意識のうちには母親に愛着を持ち、自分と同姓である父に敵意を抱く傾向で、父と知らずに父を殺害し、生母と結婚したギリシア神話のオィディプスに因んで、フロイトが提唱した用語のこと《広辞苑より》）。

去勢不安/コンプレックス･･･

ペニスの有無の間で揺れ動く感情。父への敵意への脅威→敵意の揺らぎ

　[男児]はあるものをなくす不安。

　[女児]はないものを手にする願望。

母からの分離と父との和解（父への同一化）･･･

もし、このまま敵意を抱いていれば、本当にペニスをとられてしまうかもしれないという考えを持った男児は、敵対していた父との和解交渉に入る。（去勢コンプレックスによって、敵意が弱められる）

**超自我**の形成（超自我･･･イド・自我と共に心を構成する三要素に一。自我から分化発達し、社会的価値をとりいれ、あるべき行動基準によって自我を監視し、欲動に対して検閲的態度をとるもの。精神分析の用語。《広辞苑より》）

ここでは**、父なる存在が下す命令**（ミードの「**me**」にあたる）

リビドーの再来が不可能となり、**同一化**がそれに代わる。

「同一化（identification）」

・≠（前エディプス期の）母との密着（母との密着は全肯定）

・「否定」（禁止等）を含んだ同化（禁止は男児の場合、母との密着など･･･）

・「距離」を含んだ同化　　　同一化を目指しながらも、No（禁止）が入っているので、完全な同化は無理。

・**「父」という理念**に対する同化

* 女の子の場合は？

**ペニス願望**→のちに子どもを持とうとする願望を持ち、父親を愛の対象とする。

同時に、女児として生まれたことへの怒りのため、母親から強く離反しようとする。

　　フロイトの論は、いずれの場合も科学的に存在が証明できないため、仮説の段階を得ず、現在ではほとんど否定されている。また、男性中心主義に基づくという点からも批判されている。

**（整理）**

〔男児〕あるものをなくす⇒父親に対する敵意の抑圧

　　　　　　　　　　　　　　　　↓

　　　　　　　　◉　自我の中に形成された父親の像

　　　　　　　　　　＝**超自我**の形成

　　　　　　　　◉　近親相姦の禁令の永続化

　　　　　　　　　　＝母親離れ

〔女児〕ないものを手にする＝願望

　　　　◉　与えなかった**母親への非難**＝母親離れ

◉　願望を捨て、子供を持つ願望へ

　　　→父親を愛の対象＝**超自我**の形成→社会に踏み出す

　　　　母親は**嫉妬**の対象

（やがて子どもは父親像により形成された超自我により現実の父親を批判していく＝反抗期）

* 「社会化」の諸相
* 「社会化」のさまざまな担い手

自己←→**家族**、**同輩集団**（peer group）、**学校**、**職場**、**メディア**

ミードが注目

∥

　　　∥

フロイトが注目

同輩集団：同世代の子供たち

学校：先生

メディア：テレビ・ネット

　　　　　他者の見方・考え方が内面化される

* さまざまな「社会化」

**一次的社会化（primary socialization）**…

**初等教育**（全ての子どもが同じことを教わる）

子どもが社会の一員となる過程

　人として生きて行くための最低限度の**常識**を得ること。（同一性）

**二次的社会化(secondary socialization)**…

その後のすべての過程。ある特定の社会的世界に参加（高校《普通、商業･･･》、大学《文・理》などそれぞれが他人と違うものに参加）。

個人の役割に応じて学ぶべきルールを得ること。分化・専門化。（特殊性、多様性）

**再社会化**…それまでの社会化のプロセスを消去（≠二次的社会化…一次的社会化を前提とする）

二次的社会化と再社会化の違いは、二次的社会化が一時的社会化を否定せず、累積的なものであるのに対し、再社会化は、一時的社会化で身につけた生活様式・価値観をデリートし、全く新しいものを一から身につける、という点である。（例：軍隊の丸刈り《軍隊がそれまでの世界とは違うということをわからせるもの。》　修道院《今までのものを前部捨てて入るところ。》）

◆「社会化」と「社会統制」←力点の置き方が違う

　　　　　社会化：社会で共有されている価値や規範を次世代へ伝達し、**個々人の人格**として内面化

　　　　　社会統制：社会で共有されるべき価値や規範に照らして、**個々の行為**に賞罰を

　　　　　　　　　　付与すること

～＃２のまとめ～

　自己の内部での「他者」「社会」の形成

　　ミード：「ｍｅ」（社会的自我）の形成

　　フロイト：「超自我」の形成（エディプス期）

＃３　「社会化」とはなにか③

* 自己自身による社会化

**オートポイエーシス**Autopoiesis

　システム（＝自分）の周りを取り巻くもののうち、何を受け取り、何を遮断するか選択するのはシステムであるため、**環境のあり方を決定するのはシステムであるという観点**。様々なシステムがあれば、様々な環境があり、多様なシステムが生まれる。（例えば、同じ父・母の家庭で育っても、兄弟は違って成長する。つまり、環境が同じでも、育ち方は違う）

⇒この観点だと、社会化＝自己自身による社会化

＊システム側の能動的な働きを押さえないとsocializationは語れない。

※ミードでいう「Ｉ」の働きが重要

　環境

　　　　　　　　　　　　　　　　　→オートポイエーシスの場合

　　　　　　　　　　　　　　　　　　（ポイエーシス＝何かを生産すること）

　　　　　　　　　　　　　　　　 　（ex）家具職人：システム

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　植樹：オートポイエーシス

→移植・伝達

システム

規範・文化

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　＜移植・伝達＞　　　←Luhmanは否定

* ミードにおける「me」と「I」―「I」の意味

「I」…社会のルールを取り込みつつ、能動的にそれをどう生かすかを決定する。

* 社会が変わる／社会を変える
* ローザ・パークスの抵抗

公民権運動の発端

この場合、「me」…人種差別のルールを容認する自分（南部で黒人はこうあるべきだというルール）

　　　　　「I」…人種差別は間違っているとする自分（社会のルールに従うことを拒否）

「I」が社会を批判　⇒社会を変えることは、自分を変えること

　　　　＝socializationの一つ

「カミングアウト」という実践

「me」…同性愛を悪いことだと思う自分

「I」…同性愛者である自分（内側から湧き出るもの）　「me」と「I」の葛藤

→カミングアウト：「I」を「me」の抑圧から解放

⇒同性愛者を嫌う社会を変えようとする（社会の規範を書き換えるような行動）

→**既存の社会をただうけいれるのではなく、吟味して書き換えていく。**

* 逆説としての社会化
* コールバーグの実験

このような話を子どもに聞かせ、その答えを分類する。

　　　　①、②**Pre-conventional Stage　前慣習的状態**

**（社会の決まりごとの前にあるステージ）** …自分の利益になるかどうかが重要。

③、④**Conventional Stage　慣習的状態**

**（社会の目を気にするステージ）** …社会のルール（世間体）を基準に行動。

⑤、⑥**Post-conventional Stage**

**（既存のルールを批判的に吟味）**…正義を基準に行動。何故その法律が正しいのか自分なりに理由付け。社会を変える可能性を持つ。

たいていの人間はConventional Stageまで。パークスはPostの段階。

* 「閉じた道徳」と「開かれた道徳」

**閉じた道徳（conventional）**…不動のもので変化しないとみられている。

**開かれた道徳(post-conventional)**…運動性を本質とする。常に自分を変えようとする試みを、批判的かつ反省的に遂行＝同じことが「I」と「me」の葛藤にも当てはまる。

→既存のルールを否定しているわけではなく、ダイナミズムをつかみ出して、ルールを書き換える。つまり、所与の**規範を受け入れつつ吟味**して、必要があれば書き換える。

　cf.**福音書**

　　　　　　キリストは、モーゼの十戒を受け取りつつ、解釈しなおす（全否定するのではない）。(Post-conventional)

　　　　「模倣的態度（conventional）」の「合理的態度(post-conventional)」への変換

理想と現実の亀裂→**抵抗**か、**服従**か。

抵抗…真理の要求と存在の非合理性を和解させようという試みにはすべて反対。

　超自我（「me」）つまり「父親像」に忠実な人間

　⇒超自我を確立できた（両親との対立を乗り越えられた）人間だけが抵抗できる

　　父親・規範に服従する自分を批判：post-conventional的

人間は模倣から始まるが、最終的には模倣運動を超越し、その価値を書きなければならない。＝**模倣的態度を合理的態度に転換**

現実

理想

服従・模倣

抵抗・合理性

父／超自我

「もう一つの声」

Socialization

　インプットされたものを逆説的にとる能力を必要とする

**正義の倫理**･･･コールバーグが提示、男の方が高いと主張。←垂直的なもの（具体的状況を抽象化して、答えを演繹する、上から問題を解決）

**ケアの倫理**･･･ギリガンが提示。この倫理も考えれば、男のほうが倫理感が高い、とはいえないと主張。←水平的なもの。目の前の他者とのコミュニケーションにより、合意を図る。（例）「二人でよく話し合って」「人間が生きている社会は人間同士の関わり合いによって織りなされた世界。

**正義の倫理**では説明できないある子どもの意見。

→**ケアの倫理**（人間同士の具体的な解決策）が必要

　　　男子の方がpost-conventionalに達しやすいのは、男子が道徳的に優れているからでなく、男子の正義的側面が強いから

ケア

正　義

＃０４　家族の社会学①

*Point.*

戦前の日本で離婚が多かったのは、「家」制度が強すぎたため。

□いくつかの基本概念

◆ゲマインシャフトとゲゼルシャフト

テンニースは、人間関係には「ゲマインシャフト」「ゲゼルシャフト」という２種類の土台があるといいます。

・ゲマインシャフト　生まれもって決まっている、人間が意思とは関係なしに結び付けられるムラ的な人間関係です。親と子、部族、殿様と侍、神や聖職者と信者といった家族のような関係です。

・ゲゼルシャフト　人間が自分の理性で作る契約的な人間関係です。上司と部下、買い手と売り手、お客と店員といった仕事上の関係です。

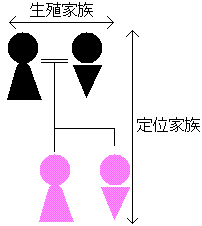
　前近代から近代への以降により、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトに優位が移りました。

パーソンズ　５つのパターン変数

|  |  |
| --- | --- |
| ゲマインシャフト | ゲゼルシャフト |
| Community | Association |
| 感情性 | 感情中立性 |
| 集合体指向  不公正の源  不変の属性  ２４時間 | 自己指向  公正の確保 |
| 個別主義 | 普遍主義 |
| 属性本位 | 業績主義 |
| 無限定性 | 限定性 |

『東京物語』という映画では、田舎から東京の子供たちに会いに来た老夫婦が仕事で忙しい子供たちに邪険に扱われます。戦争で死んだ次男の妻が老夫婦の世話をしてくれますが、田舎に帰った後おばあさんが亡くなってしまいます。ようやく次男の未亡人が再婚できるようになり、めでたしめでたしです。

　『クレイマーＶＳクレイマー』という映画では、離婚裁判と親権訴訟が行われます。

　「ゲマインシャフト」の解体、「ゲゼルシャフト」への以降がみられます。

◆家族の二つの位相

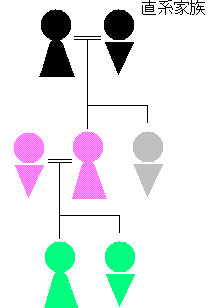
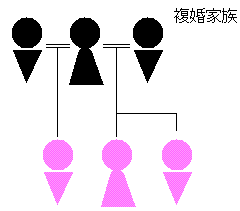
|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| (1) | 定位家族 | …子供の目から見た家族 |
| (2) | 生殖家族 | …親世代から見た家族 |

子供にとっては生まれたときから決まっている家族ですが、親にとっては成人後に相手を決めて作った家族です。

◆家族の諸形態――G・P・マードック

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| (1) | 核家族 | …　ひと組の夫婦とその子供から成る家族(下のすべてに共通) | |
| (2) | 複婚家族 | …　核家族を夫婦関係において連結した家族 | |
| (3) | 拡大家族 | …　核家族を親子関係において連結した家族 | |
|  | 直系家族 | | …　子供が何人いても一人の既婚子とのみ同居 | |
|  | 複合家族 | | …　同居する既婚子も一人に限定しない | |
|  | 夫居制 | | …　夫の家か、その近くに住む | |
|  | 妻居制 | | …　妻の家か、その近くに住む | |
|  | 双居制 | | …　夫と妻、どちらの家(の近く)にも住める | |
|  | 新居制 | | …夫と妻、どちらの家からも離れて住む | |
|  | 叔父居制 | | …妻の母方の叔父の家か、その近くに住む | |

しかし･･･・子供のいない家族、・「子居制」さらに母子家庭といった家族形態もある。

灰色の男性は同居していない。

文化圏ごと（人工比例ではない）では、一夫多妻制が８割を占める。次点が一夫一妻制。

人工比例では一夫一妻制がほとんど。

|  |  |
| --- | --- |
| a | 夫婦のみ |
| B | 夫婦とその子供 |
| C | 単親とその子供 |
| D | その他の親族世帯 |
| E | 単身世帯 |

□日本における家族の変容と動向

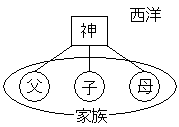
政府国勢調査では、三世代でないすべての家族を核家族と呼ぶため、一般的な定義よりも拡張されています。「核家族化」というより、高齢者の単身・夫婦のみ世帯の増加がみられます。

日本における普通離婚率の推移（国立社会保障・人口問題研究所編「人口の動向」(1994, 1999～2002, 2004～2008)より）

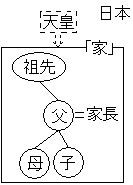
「ゲマインシャフト的要素の強い前近代社会では、離婚は少なく、ゲゼルシャフト的要素を強める近代化とともに離婚は多くなる？」という仮説は、戦前の日本を見れば明らかに成り立ちません。これは、日本ではあまりに「家族のつながり」が強すぎたために妻が夫の親に受け入れられず、離婚させられてしまうためでした（貝原益軒の『女大学』における「七去の定め」、旧民法）。急激な離婚率の減少は、結婚しても届け出ない事実婚が中心になり、離婚せずに何年もたって初めて届け出るようになったためです。この日本における高い離婚率、身勝手な離婚を、福沢諭吉は強く批判して、「家」制度の束縛を断った欧米型の「フリー・ラヴ」を提唱しました。

＃０５　家族の社会学②―日本社会と家族

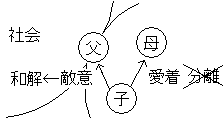
*Point.*

「家族国家」「日本の伝統」は、明治以降の近代化の過程で作られたもの。民衆は「家族国家」に馴染むことはなく、「家」制度が圧倒的な影響力を持っていた。結果、優性政策は頓挫した。

□民法典論争

ボアソナードが西洋流の民法典を作成したところ、穂積八束が「民法出でて忠孝亡ぶ」、民法典は日本の「家」制度と矛盾すると批判しました。結局八束の主張が通り、世に言う明治民法が作られ施行されました。

　前近代の象徴である儒教という言葉を使いたくなかった八束は「祖先教」という言葉を作り、キリスト教の「神の下の平等」により個人を最優先とする個人主義の立場に立つ西洋と、「祖先教」の下で「家」を最優先とする集団主義の立場に立つ日本とは違いがあるとしました。

　この結果生まれた明治民法では、戸主となるべき男子の相続人が重要視され、妾制度、すなわち複婚を事実上認めていました。

　このように親と子のつながりが強い「家」制度のもとでは、フロイトの枠組みにおける母と子の分離が行われず、嫁姑問題の原因になっているとの指摘もあります。

□「家族国家」としての日本

　日本を民族国家とするためのイデオロギーとして、「家族国家」が明治になって提唱されました。親や先祖を大切に思うならば、日本人は同じ先祖を持つから、民族の始祖である天皇を大切に思いなさい、「家」と同じように国家を愛しなさい、という論理です（参考文献：『心のノート』）。

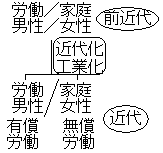
　ところが、実際のところ人々に「家族国家」の論理は浸透していませんでした。これは、特攻が決まった若者が「天皇のため」ではなく「家族のため」に死ぬのだと納得したエピソードや、柳田國男が死んだ若人の話において靖国神社を無視、この若人たちは家族のために死んだのだと暗に示したことからも伺えます。

　この事情は、ドイツとは対照的です。ドイツでは「祖国ドイツのために」戦死した人が多かったのに対し、日本ではあくまで「家族のための」戦死でした。ドイツでは「祖国ドイツのために」断種を含む優勢政策が採られましたが、日本では国民優性法が、「家」の血統を絶やすことは認められないと猛烈な反対を受けて頓挫しています。

＃０６　家族の社会学③　フェミニズムから見る家族

*Point.*

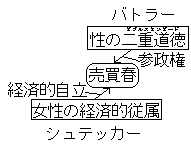
女性を「家庭的なもの」と結びつける考えは近代の工場制度以降のもの。経済的に男性に依存する立場になった女性の権利回復を求め、バトラーは参政権を、シュテッカーは経済的平等を求めた。

□「家父長制」という構造

前近代において、仕事と家庭は一体でした。たとえば農業では、家の周りの畑を、働ける年齢の家族みなで種蒔き、間引き、収穫していました。手工業も、家で家族みなで行うものでした。

　産業化が進むと、工場という家から離れた場所で仕事が行われるようになり、男性は工場での仕事、女性は家庭での家事労働という分業が行われるようになりました。

　工場労働による生産とその生産物の取引が行われる「市場」は、資源と労働力を使って生産を行い、ゴミや働けなくなった老人、病人、障害者を廃棄する装置で、そこでは働ける者と資源にしか価値が与えられません。この市場経済のもとでは、家庭にいる女性は「市場」に価値がないとみなされ、給与を貰うことが出来ません。

□参政権と経済的自立―売春婦問題と初期フェミニズムの主張

　イギリスでは伝染病法により、軍隊での性病蔓延予防策として「公娼」に定期健診を受けさせ（※当然かなりの反発にあいました）、逆らう場合などは性病科病院や牢屋に収容していました。

　ジョセフィン・バトラーは、女性は一婦一夫制で、男性は一夫多妻制という性道徳の二重基準を指摘、自己防衛のための参政権の獲得を目指しました。

　ヘレン・シュテッカーは、主婦も売春婦も経済的依存に捕らわれていると指摘、女性の就労、家事労働の経済評価、母親保険の設立による女性の経済的自立を目指しました。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| １５歳以上人口 | 労働力人口 | 就業者 | 従業者 |
| 休業者 育児休暇など |
| 完 全 失 業 者（働く意思のある人） | |
| 非労働力人口(働く意思を示していない人) | 通 学 | |
| 家 事 | |
| その他（高齢者etc.） | |

　９０年代に日本で『売る売らないはワタシが決める』という本がよく売れましたが、実際には経済的困窮が原因である場合が多いのに自由意志であるかのように言うのは危険です。

□データでみる男女の格差

　労働力率とは、労働力人口／人工総数です。西洋諸国と異なり日本や韓国では、２５歳後半に専業主婦になり４０代からパートをはじめるような、育児期に労働力人口に加算されない女性が多く、グラフがＭ字カーブを描きます。労働力人口の定義は右のとおりです。

　実際、女性の年齢別労働力の推移（日本）を見ると３０－３９歳の労働力率がかなり低いことがわかります。一方で２５－２９歳の労働力率は３０年で３０％と急増しています。

　さて、雇用の男女格差は労働力率だけにとどまらず賃金にも表れています。男女雇用機会均等法により、企業は男性を「総合職」として要職につけ女性を「一般職」として雑務にあてるコース別人事を導入しました。結果として、女性の賃金水準は男性の６６％程度です。欧米と比べかなり低い水準です。日本における女性の賃金水準の推移でのグラフマジックに注意です。均等法以後も変化はほとんどありません。また、各国の女性の賃金率ではフィリピンが高い値を出していますが、これは高所得者層だけが調査対象だからです。

　就業と家事では夫の家事労働時間が極めて短く、特に共働き世帯のほうが短いのは、共働きせざるを得ないほど給与が低く家事に時間を割けないためです。

以下の内容は、レジュメにはないが授業で扱われたものを復元したものです。

女性の年齢別対男性賃金率（2008）出典：賃金構造基本統計調査

　Ｍ字カーブの後パートタイマーとして就職する女性の賃金が安いのに対し総合職の男性は賃金が上がり続けます。

また、日本では母子世帯の８０％が相対的貧困に陥っています。相対的貧困とは所得が中央値（順位が真ん中の値。100,200,200,300,800,1000,1000では300）の半分以下（中央値３００なら１５０以下）の人のことです。

　さて、６０歳以上で離婚したときに厚生年金が分割されるようになりました。サラリーマンの夫の妻は第３号被保険者として国民年金のみに加入していますが、離婚した場合に夫の厚生年金を（最大半分）分割して、受け取れるようになりました。

　最後に東大の話です。「男女共同参画社会の形成に寄与する」といっている東大ですがその男女格差たるや民間企業以上のひどさです。確かに非正規雇用の人は女性のほうが多いのですが、上級の職員になるほど女性の割合が少なくなっていきます。博士課程では女性が３割なのに、女性の教授はわずかに８．９％。ちなみにこの女性教授割合は、一橋では１割、東工大では５．２％とのことです。

文責：寺島

＃７　宗教の社会学―M.ウェーバー①

* 方法としての「理解社会学」

M.ウェーバー、デュルケーム…社会学を構築するに当たって、宗教に関する考察をベースとする。

**意欲する人間**…M.ウェーバーの考察対象。「人間は何も欲しないより、無を欲する」＝**人間はいつも何かを欲してやまない存在**。

（ニーチェ『道徳の系譜』…ウェーバーに影響）

人間の行動は理解可能な形で解明しうる。

ある行為に対して、物証を固める方向から迫るのが「説明」、動機の解明から入るのが「理解」。社会科学の目的はこの「理解」のほう。

意欲する人間を考察するとき、その人が何を欲していたかを他の人が理解することが必要。（例）犯罪捜査…物証と動機（犯人は何を欲していたか）を突き止める必要がある

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　←説明

物証

動機

　理解→

**方法論的個人主義**…個人が社会をつくる。社会をつくる、意欲する一人ひとりに注目。

つまり、個人に注目して、**一人一人の行いから社会全体を見る**。

社　会

≠**方法論的集合主義**…**社会のしくみが個人に影響を与え、個人を作る**という考え方。

社会

**目的合理的理解**

　その行為はいかなる目的のための手段であるのか？ということを理解すること。つまり、ある行為をある目的を達するための手段であると位置づけること。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　行為①～④の例

手段―目的

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　①授業を受ける

手段―目的

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　②卒業する

手段―目的

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　③就職する

　　　　行為①　②　　③　　　④　　　　　　　④大金を得る

　　＜現在＞　　　　　　　　　　＜未来＞

**目的非合理的なもの**

　他の目的の手段とはならないもの。

個人の未来は無限ではないので、　行為の目的・手段の連関をたどり、行為者の未来を極限まで突き詰めると、**目的合理的理解は、どこかで死にぶつかる**。（例）勉強をする（手段）→東大に入る（目的）、東大に入る（手段）→官僚になる（目的）、官僚になる（手段）→･･･→**死**（目的）

個人にとって究極的な価値を追及した場合、**宗教**に行き着くことになる。

* プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神
* 「資本主義の精神」

**資本主義の精神**…ベンジャミン・フランクリンの思想

　時間は貨幣。自分の資本を増加させることが目的と考えるのが、各人の義務。

**職業義務**←**プロテスタンティズム**に由来（神が人に授けたのが、職業）

　職業は単なる利潤の追求の営みであるが、各人は自分の**義務**だととらえている。

　職業義務抜きでは資本主義は成り立たない。

* 伝統主義

**伝統主義**…資本主義の浸透を妨害し続けたもの

人は古来より、できるだけ多くの貨幣を手に入れることを望まず、必要最低限の貨幣で簡素に生活することを望む。＝伝統主義

当初はヨーロッパにおいてさえ伝統主義が支配的だった。

(例) 通常は…

１マルク（＠エーカー）×２.５エーカー＝２.５マルク

期待としては…多い収入により、更に働いてくれると期待

１.２５マルク（＠エーカー）×３エーカー＝３.７５マルク　⇒資本主義の精神

しかし実際は…2.5マルクの収入を維持し、それまでの生活を維持できればよいと考え、むしろ労働は減少

１.２５マルク（＠エーカー）×２エーカー＝２.５マルク　　⇒伝統主義

このような伝統主義を突破するものがないと、資本主義の精神は生まれない

→その突破するものこそ**プロテスタンティズムの倫理**

資本主義

伝統主義

* プロテスタンティズムの倫理

**カルヴィニズム**の**予定説**…人類の一部が救われ、残りの人間は滅亡の運命にある（これは不可知）

ウエストミンスター会議

　イギリスのチャールズ１世に対抗するために、スコットランドのキリスト教（カルヴァンの教え＝二重予定説）をイギリスの協会でも採択しようとして開かれた。

人間を超越しているもの＝神

神の決定によって人間の生死は決まっている→人間がどうしたって何も変わらない

　　↓

これを突きつけられた信者は→圧倒的な無力感、**内面的孤独化**

さらに「どうすれば自分が神に選ばれている確信を持てるか」と悩みで頭が一杯に

→この状態を唯一救ったのが職業労働（＝Calling）である。

自己確信を獲得するため、**絶え間ない職業労働**を厳しく教え込む

つまり、救済に関する不可知論と手がかりとしての職業労働は常にセット。

セットでないと伝統主義に戻ってしまう。

※職業労働はあくまで手がかりであるため、結局自分が救われるかどうかは不明

　こうした状態の人々の集積が資本主義であるとウェーバーは考えた

◎カルヴィニズムの構造

　　救済に関する不可知論

　　　　　　　　　手がかりとしての職業労働

このふたつは常にループしていることで、伝統主義とは違う資本主義精神が生まれる

◎Ｍ・ウェーバーの現代資本主義社会の起源のとき方

近代資本主義社会　　　　　　　　　　　　カルヴィニズム

　　　　　　　　　　　　　　伝統主義　資本主義の精神

方法論的個人主義　　　　　　　　　　　　　方法としての理解

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　意欲する人間

しかし…

「現代の資本主義の中では人間はただの歯車であり、意欲する人間は必要とされていない」

と、ウェーバーは言う。

ウェーバーは、「社会」を「意欲する人間」という個人に分解して、つまり、個人の行為の積み重ねとして、社会を考えようとしていた。これが先にも述べた「方法論的個人主義」というものである。上図はウェーバーのこのような考え方により、近代資本主義社会を意欲する人間に分解し、個々人の動機を解明することで、何故近代資本主義社会が生まれたのか、を解明する過程を表したもの。その個々人たる意欲する人間は、カルヴィニズムによって「伝統主義」を乗り越え、「資本主義の精神」を育み、この精神によって近代資本主義社会が成立したのである。

＃８　宗教の社会学―M.ウェーバー②

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　カルヴィニズム

　　　　　　　　　　　　　　　　　　伝統主義　資本主義の精神

　　方法論的

　　　個人主義

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　方法としての理解/意欲する人間

◆「プロテスタンティズムの倫理」と「資本主義の精神」の違い

　　近代資本社会＝意欲する人間の営みの結果

　　しかし、人間の営みによって作られた近代資本社会が人間のライフスタイルを拘束

　　（圧倒的な力、逃れえない力）

　　「**プロテスタンティズムの倫理**」…天職人たらんと欲したピューリタン（wollen）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　↑

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　カルヴィニスト

「**資本主義の精神**」…天職人たらざるを得ない現代人（mussen）

プロテスタンティズム倫理

意欲する人間

資本主義の精神

　cf.Burgerの客体化（Objectivation）（＃１参照）

　　◆　末人とは（ニーチェの説をM.ウェーバーが引用）

　　　前提：人間である以上、何も欲しないより、無を欲する。

|  |
| --- |
| **末人**…自分が何を欲しているのかわからない |

　　　　　　（欲しているものが無であることがわからない）

　　　　　＝自分を軽蔑することを知らない

　　　つまり、「儲けるだけ儲けるが、儲けて何になるのかわからない」フランクリンのような人間（**目的合理的人間**）は末人。

　　　究極の目的は手段にはならない＝**目的非合理性**（これを見失っている人は末人）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　（究極的な価値と生の意義）

* 「ホモ・エコノミクス」の相対化

経済学とは違う社会学の点から見る

社会学…経済学が根底としているものがどこでどのようにして生まれたかを見ていくもの

　◇世界宗教の比較社会学

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 宗教 | 非合理性 |  | 結果 |
| 儒教 | 呪術 | 伝統の不可侵性 | 現世への順応 |
| ピューリタニズム | 超越神の決断 | 「進歩」という合理的な没主観性 | 現世への合理的改造 |

中国の宗教　儒教とピューリタニズム

両者に共通するのは**非合理的な根底**を持つこと。

儒教…**呪術**が根底

**自然の秩序**　　　⇔　　　**社会の秩序**（「論語」などが提示）

　　　　　　　呪術（「**易経**」など）が両者を関係付け

社会（伝統）の乱れ⇒自然の乱れ

　　　　　→伝統の継承が大事

　　　呪術は**伝統の不可侵性**しかもたらさない。＝**現世への順応**

人間的な恭順の義務を教える

　cf.『捜神記』『京房易伝』

社会の秩序の乱れが自然の秩序の乱れ（またはその逆）を引き起こす例

　　　　ピューリタニズム…自然、社会を超越した**超越神**が根底

　　　　　　　超越神は、自然の秩序や社会の秩序を**合理的に改造**する。

　　　　　　　どんな場合でも神との関係がすべてに優先

儒教　　　　　　五経

四書　　　　　　易経←呪術的なものが「易」の中にあるらしい

論語　　　　　　詩経

大学　　　　　　礼記

中庸　　　　　　春秋

孟子

易…社会と自然の秩序の間にどのような異変があるかを読み取る。

●社会の秩序

　　　　　呪術⇒伝統の不可侵性　　　←儒教

●自然の秩序

　　　　合理的改造　　　　　　　　　←ピューリタニズム

●超越神

**◆インドの宗教**

ヒンドゥー教

C

B

A

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　←サンサーラ

　　　　　　　Aでの行為がBに影響し、Bでの行為がCに影響する

　　　　　　　　＝カルマン

**サンサーラ**…輪廻転生

　　　　　　絶えず逃れられない死が訪れるため、恐れられた

**カルマン**…前世でいいことをすると後の世でのカーストが上がる。人生Ａの結果、人生Ｂ（来世）の良し悪し（カースト）が決まる＝今の功徳が来世に反映される。

**カースト**…伝統の不可侵性

カーストの破壊は、来世での上昇を捨てることを意味した。

仏教はサンサーラの車輪の中から脱出することを教える＝超越しようとした。

（悟り、解脱といった概念）

問題：現存している秩序からどうやって人は抜け出せるのか。

* 救済の二つの方向

現世への順応＝伝統の不可侵状態(儒教)からどうやって抜け出すか

→２つの方向

**瞑想**

**行動**

**超越**

②現世の合理的改造（カルヴァン派）

**使命予言**…行動的・禁欲的な生活の要求を現世に突きつける

自らは**神の道具**（超越的な視線から現世に回帰）

**（現世内的禁欲）**

イラン、西アジアおよび西洋の宗教意識を支配

①現世からの逃避（仏教、道教、ルター派）

**模範予言**…瞑想的、無感動的な生活の模範を示す

自らは**神の容器**

**（現世逃避的瞑想）**

インドおよび中国の宗教意識を支配

③現世への順応（儒教、ヒンドゥー）

（伝統の不可侵性）

**停留**

①：非人格的な最高の存在、という神概念/仏教・道教・ルター派

②：人格的である創造主、という神概念/カルヴァン派

③：儒教・ヒンドゥー教

このように、ウェーバーは、プロテスタンティズムや、カルヴァニズム以外の他の宗教がどうであるのかにまで視野を広げた。この意味では、ウェーバーは西洋中心主義を脱却しているように見える。が、他方では彼はこれらの宗教を平等に扱っていないとも見られ、その意味では脱却していないともいえるのである。つまり、彼は②＞①＞③という序列をつけており、結局西洋の②を上位においているという意味で西洋中心主義を脱却したとはいえない、というわけだ。

（↑の根拠）：「脱呪術化/救済への道を現世改造へ切り替えるという二つを達成したのは西　　　　　　　　洋のプロテスタンティズムにおける教会（生まれながらにして人々が所属する集団・ゲマインシャフト）及び信団（信仰を同じくする者の結社・ゲゼルシャフト）の形成の場合のみ」

また、ウェーバーはこの宗教的相違により、社会の仕組みも異なるとした

* 日本の近代化と宗教―「プロテスタンティズムの倫理」は存在したのか？
* M.ウェーバーの見解

日本には呪術的な宗教的伝統主義も救済論的伝統主義もない。西洋で資本主義を生み出したような宗教もなかったし、それを妨げるような伝統主義もなかった。日本の資本主義は西洋から輸入し学んだもの。

→それは封建制の打破、近代化に有利（「乾いたスポンジ」）

* 「恩と報恩」の倫理―R.ベラー（1927～）の見解

ベラーは日本近代化の積極的な要因を見つけ出そうとする

呪術、救済論はないが、日本の宗教には至高的存在の観念はある。

それは政治的上位者や両親に姿を変える。→「**恩と報恩**」思想へ

レジュメ「人間の受ける恩恵が、それに報いる能力を超えて遥かに大きいから、実際には、人間はごく少量を返しうるだけである･･･人は決して償うことが出来ない。**人は常に負い目に立っている**」。これはカルヴィニズムと同じ無限のループに通じるものがある。

慈悲深い存在者

　　　　恩　　報恩

人間

* 丸山真男（1914～1996）からの批判

本当の意味での近代化を推進しなければいけないという立場

○恩と報恩の論理は日本にしか通用しない

→日本の近代化には**普遍的要素**が欠けている、つまり、日本の近代化は日本にしか通用しない＝**擬似普遍主義**

（歪んだ近代化＝エセ近代化。諸外国との軋轢を生み出し、戦争を引き起こす結果に）

○個別主義的近代化の問題点：ナショナリズムになってしまう（日本、45年以前）

　普遍主義的近代化の問題点：コロニアリズムになってしまう（キリスト教国）

　　　　　　　　　　　　　　文化の押し付け

cf.Parsons（＃４参照）

　個別主義…特定の関係を結んでいる人に、好意的にまたは敵意的に接する。ある人だけを優遇。

　　　　　普遍主義…誰にでも等しく接する

　　穂積八束の見る日本

日本の近代化＝「疑似」普遍主義

　　　　　　　西洋のような普遍主義は持っていない。

　穂積「日本にしか通用しない近代化でいい」

丸山「ゆがんだ近代化は修正すべき」

　　　個別的な近代化＝ナショナリズムにつながる。

　　　　↓

　　　1946年以降、普遍主義的近代化を目標に

＃９　宗教の社会学③―E.デュルケーム

（ウェーバーと正反対のスタンスをとる）

* 方法論的集合主義

**方法論的集合主義**…個人に対して拘束力を持った**社会的事実**をまず前提とし、それが個人に対してどう影響力を与えるかを調べる。

≠方法論的個人主義（M.ウェーバーの思想の柱。**個人の行為の積み重ね**として社会を調べる。）

※社会的事実は、個人に対しては外在し、かつ個人の上に否応なく影響を及ぼすことの出来る一種の強制力を持っている。

＜方法論的個人主義＞

社会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ウェーバー

個人

＜方法論的集合主義＞

　　　　デュルケーム

　◇自殺論

行　　為　（　　自　　殺　　）

　　　　　　　　　ウェーバー

＜個人＞（様々な動機）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　デュルケーム

＜　社　会　的　事　実　＞

　　　　　　　　　　　①**自己本位的自殺**：社会の凝集力の弛緩

　　　　　　　　　　　②**集団本位的自殺**：社会の凝集力が強すぎ

　　　　　　　　　　　③**アノミー的自殺**：自明視されていた**社会規範の崩壊**

社会を構成する個人は年々変わっていくのに、自殺者の数は変わらない。

⇒社会の制度の中に、自殺の最も大きな原因が含まれている。

(ex)失業率と自殺率に相関関係がある国もない国もある←動機とは別の自殺要因が

自殺の３類型

1. **自己本位的自殺**

社会の統合が弱まり、**個人が孤立する社会**で多い

**自己本位主義**　個人化から生じる自殺

プロテスタントに多い←自分が救済されるかは最初から決められていて、しかも自分が救われるかどうかは絶対にわからないので、かつてないほどの深い内面的孤立化を迫られるから。（＃７参照）社会的な凝集力を持つ教会が重視されないことも理由の一つ

1. **集団本位的自殺**

軍隊＞市民

なぜか…？

　―あまりにも社会的凝集力が強すぎると個人の自我が埋もれてしまうから＝集団性が強すぎて自我の自由が認められないから。

Ex. 切腹…“家のために、君主のために”

**集団本位主義**（**愛他主義**）⇒自分のことよりも他の人を思いやって自殺をしてしまう

1. **アノミー的自殺**

大恐慌（不況）時でも、改革（好況）時でも、自殺が増加

⇒自明視してきた**社会のルール、仕組み**が一気に崩れるときに起こる自殺

（人の活動に対する規制がなくなると、かえって苦悩が増える）

個

人

社会

　　　　　　　自己本位的自殺（ウェーバー）

プロテスタンティズム

　　　　　　　近代資本主義社会（デュル）

* 『宗教生活の原初状態』

「宗教」の定義

|  |  |
| --- | --- |
| （１）信念 | 聖／俗の弁別 |
| （２）儀礼 |
| （３）教会 | （集団的）統合 |

►大事なのは個々人ではなく、**集団的統合**である。

→宗教によって普段バラバラな人がどのように結びつくか、ということ。

ウェーバー：**洗練された宗教**を対象

　　　　　　　例） キリスト教、儒教

　　　　　　　教会を個人に生の意味を教える存在とする

デュルケーム：**原始的な信仰**を対象

　　　　　　　例）アボリジニー

教会を集団を集団たらしめる存在とする

　　　→内面的孤独を増すプロテスタンティズムは特殊

◎　宗教…人々を孤立化させるのではなく、人と人を結びつけるもの。

つまり、宗教とは聖なる物（分離され禁止によって保護されたもの）と関連付けられた信念および行動からなる一つの体系であり、信念および行動は「教会」＝同一の道徳的共同体を舞台に、**信者を一つに結合**させる。

宗教的信念は、分有されるときにのみ、活動的。

≠ウェーバーの考える宗教

　　意欲する人間に対して、究極の価値と生の意義を教えるもの

（宗教とは個人のもの）

* 儀礼の二つの側面

聖なる存在は分離される存在。

**消極的礼拝**…聖／俗を分離する儀礼　タブーの形態をとる

**積極的礼拝**…遠ざけられた聖なるものと、特別な日（≠日常）に接触すること

⇒積極的礼拝を行うことで、人々は共に神聖なものに接し、人々の連帯意識が定期的に再生産される。（社会における宗教の重要性）

e.g.日本の場合

　消極的礼拝：ご神木のしめ縄

　　しめ縄は神聖な場所と下界を**区別**。また、普通の木とご神木を**区別**。

　積極的礼拝：祭りの神輿

　　神輿は普段は隠されていて見ることはできないが、祭事のときだけ触れることができる。

**供犠**（sacrifice）…食事を神に捧げるのと同時に自分も食べることで、両者の間の**交信**を行う。

　e.g.最後の晩餐

　　　　　　　キリストという人間を神に捧げつつ、信徒はその肉や血（パンやぶどう酒をこと）を食べる。⇒キリスト教信徒の**連帯の強化**

　　　　　　　裏切り者のユダという排除された存在も

　　　　　　　　→ある集団の同一性が確認されるときには必ず排除されるものがいる

* 儀礼…ネガティブなものもある

　　　　　　　　　例）阪神大震災の日にみんなで追悼をする

　　　　積極的儀礼は、常に**真の涜聖**を伴う。

　　　　また、同じ聖なるものでも、正の方向に切り離されるものと、負の方向切り離されるもの（穢れたもの）の2種類がある。

|  |  |
| --- | --- |
| 俗 | 聖〔＝非俗〕（＋） |
| 聖〔＝非俗〕（－） |

例）全身入れ墨の人がおみこしの上に乗っている

　　　⇒＋の聖と－の聖が混在している

　　　　人々は(＋)(－)両方の聖と同時に接触できる

　　　　　→統合し、社会を形成

トーテミズム（と模擬的儀礼）

**トーテミズム**の定義

　ある人間集団が、ある特定の種の動植物（＝**トーテム**）、もしくは他の事物と特殊な関係を持っているとする信仰。およびそれに基づく制度。

**模擬的儀礼**…カンガルーをトーテムとして祭っている部族は、カンガルーの模倣のような運動をする。聖なる存在が象徴化する集合的理想と交通する手段。

⇒これは部族の**連結の徴**（しるし）。互いに同じ道徳的共同社会の部員であることを証明しあい、親縁関係の意識を持つ。

異なる解釈（レヴィ・ストロース）

◎デュルケームのトーテミズム

自然：　　種１　　　種２　　　　　　　　　種ｎ

　　　　　∥　　　　∥　　・・・・・・　　∥

人間：　集団１　　集団２　　　　　　　　集団ｎ

自分達が支えているトーテムを**同一化しながら集団に統一性を与える**

◎Ｃ・レヴィ＝ストロースのトーテミズム

自然：　　種１　≠　　種２　　　≠　　　種ｎ

　　　　　　　　　　　　　　　　…

人間：　集団１　≠　　集団２　　≠　　集団ｎ

トーテミズムにおいて大事なのは「同一性」ではなく「**差異**」である

**「差異」があって初めて「同一性」が生まれる**

●ある集団が自分たちの統一性を感じているのは、その裏に他の集団との間の差異（時には敵意）があるためである。

例）最後の晩餐（裏切り者ユダとの差異）

　　　　ナショナリズム

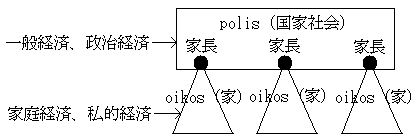
　　　　いじめ

＃１０　経済の社会学①「社会的」という理念

*Point.*

生産力の増大を目指す「政治経済学」を批判するものとして平等を志す「社会的」なものが生まれたが、やがて「社会的」という言葉が抽象化され、「平等」や「友愛」にこだわらなくなった。

□「政治経済学」の誕生（１８世紀）

　経済学を意味するeconomieという言葉はもともと、一族の台所を仕切る家庭経済、私的経済を意味していましたが、後に拡張されて現在のような一般経済、政治経済を意味するようになりました。以下ではまず、「社会的」なものの批判を受けることになる、」１８C全盛の「政治経済学」について説明します。

　アダム・スミスの『諸国民の富』の内容は次の通りです。まず、分業をすることで効率よい生産が可能になります。そして、分業により１つの物の生産に特化したことで、生活に必要な物を得るために交換をする必要が出てきます。この交換を効率よく行うために、汎く価値を持つ物を貨幣とするようになりました。

分業⇒富の増大

　　⇒交換と貨幣

　　　↑

　　利己心

　アダム・スミスは、結果として社会全体の生産力を高める分業という行為は個々人の利己心によって起こると唱えます。誰しもが自分の利益を増やそうと分業を始めた結果、社会全体が利益を得るというのです。この、自分のことしか考えていないのに社会全体の利益になる現象を、アダム・スミスは「見えない手」と表現しました。  
□批判者たち―「社会的social」なものの隆盛（１９世紀）

　シスモンディ、トムソン、コント、エンゲルスの４人が登場します。４人とも１８Cの「政治経済学」に対し、生産力の追求が社会に幸福をもたらすとは限らないと批判をしています。

■シスモンディ

　「総需要＝総供給」「作った物は必ず売れる」というセイの法則に異を唱えたのがシスモンディです。

富の不平等な分配

機械化の弊害—失業

過剰生産の可能性

生産力の増大≠万人の幸福

　フランス最初の恐慌を受けて、彼は「政治経済学」をそのままフランスに導入するのは間違っていると考えました。労働者の手には最小限の生産物しか残らず、機械化により必要労働者数が減った結果失業が増え、これらによって労働者＝消費者の購買力が減退し過剰生産に陥る。つまり、生産力の増大は必ずしも人間の幸福につながるわけではないと考え、「政治経済学」の修正が必要だと述べました。彼が求めた政策は、後に「社会経済学」や「社会政策」と呼ばれるようになりました。

機　⇒　生産増大

械

化　⇒　消費減少

■トムソン

「政治経済学」と「社会科学」

「生産」から「分配」へ

「効用」に基づく分配

　トムソンは「社会科学」という言葉を用いて、富の効率よい生産ではなく効率よい分配を模索することを訴え、「効用」を最大化する分配を求めました。

　１億円持っている人と１万円持っている人では、千円をもらったときの喜びは後者の方が断然大きい、つまり同じ千円でも後者に渡した方が効用が大きくなると考えたわけです。

■コント

　経済活動の無制限の自由を金科玉条とする「政治経済学」に対し、コントは「形而上学的」つまり「現実を見ていない」と厳しく批判を向けました。彼は、機械化によって現に発生している弊害を是正するために、産業の統制が必要だと考え、「社会学」の成立を期待しました。

■エンゲルス

　イギリスの労働者たちの悲惨な生活環境（平均寿命１５歳）を例に挙げて、エンゲルスはこれを「社会的殺人」と呼んで糾弾しました。彼の思想は、＃１１で扱われるマルクスのものと共鳴しています。

■まとめ

|  |  |
| --- | --- |
| １８C　政治経済学 | １９C　社会学 |
| 生産に焦点 | 分配に焦点 |
| 全体の不可視性（見えない手） | 全体の可視化 |
| 市場への不介入 | 市場への介入 |

　シスモンディ、トムソン、コント、エンゲルスらが追い求めた１９Cの「社会的な」ものとは、

自由←―***対立***―→平等

↑

　　　 友愛

人々の間に格差と不平等をもたらす力、自然ではなく人間が生み出す力に対する、格差や不平等を是正していくための実践です。

　１８Cの市民革命で確立された「自由」「平等」「友愛」は、１９Cになって「自由」と「平等」が対立するようになり（自由な経済活動が平等を損なう）、この２つを両立させる理念として１９Cに「友愛」が再構築されました。結果として「社会的な」国家、福祉国家が誕生し、この「社会的」という言葉はドイツやフランスの憲法にも残っています。

■２０Cの変化

　１９Cのシスモンディ、トムソン、コント、エンゲルスらが社会科学者の第１世代だとすれば、マックス・ウェーバーに代表される２０Cの社会科学者たちは第２世代です。

　ウェーバーは「社会科学の客観性」「価値自由」を訴えて、社会科学はあらゆる価値観に対し中立的な立場をとるとしました。社会学≠社会主義、あらゆるものが「社会的」として、「社会的」という言葉を抽象化したのです。

　１９Cの時点では、見てきた通り「社会的」という言葉は明らかに平等を志向するものでした。そこには、機械化による労働者の悲惨な状況というバックグラウンドがありました。

　しかし２０Cになると、もはや「社会的」という言葉から平等指向性は消えてしまい、より中立的な概念として意味が変わってしまったのです。

＃１１　経済の社会学②—２０世紀の資本主義

*Point.*

マルクスが批判したような「労働者圧迫→消費の減退→過剰生産（恐慌）」という問題を解決するため有効需要創出政策がとられ、やがては必要以上の商品を生産し、そして消費する「消費社会」が誕生した。

◇マルクスの「政治経済学批判」（＝『資本論』）

■交換をめぐる二つの視点

　マルクスは「労働価値説」を唱え、労働者が資本家に「搾取」されていると説きました。この「労働価値説」をまず説明します。

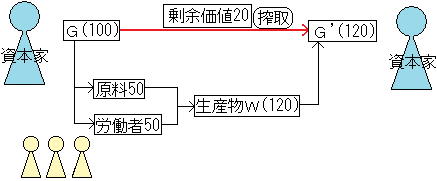
W＝商品（生産物）　G＝貨幣

→　W　→　G　→　W’　→　G’　→

　いま、市場で小麦（W）を売って＄１００（G）を得て、この＄１００でパン（W’）を買い、パンを売ったら＄１２０（G’）になったという事態を考えます。

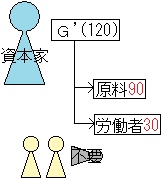
　まず、小麦を売ってパンを買うプロセスに不思議なことはありません。小麦とパンは違う物だからです。（①　W　→　G　→　W’、質的差異、「使用価値」の差異）

　しかし、＄１００で買ったパンが＄１２０になったプロセスは異常です。＄１００と＄１２０は両方とも貨幣であって、質的差異はなく量的差異のみがあります。（②　G　→　W’　→　G’）



　「労働価値説」によれば、実際のところ＄１００で買ったのは＄５０分ずつの原料と労働者で、この労働者の労働は実質的に＄７０の価値を作り出し（剰余価値）、結果できた生産物は＄１２０の価値を持ちます。この労働者は実際には＄７０分の働きをしているのに＄５０しかもらえず、この差額（剰余価値）の＄２０が資本家の懐に入ることで＄１００が＄１２０に化けるのだとマルクスは主張します。

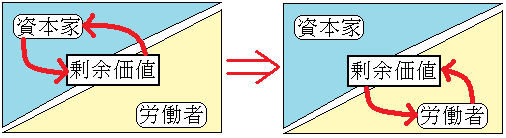
■「過剰人口」—なぜ失業するのか？

　さらに、「資本の有機的構成の変化」が起こります。これは、かつて原料：労働者を５０：５０にしていたのが、労働者が生み出した剰余価値のおかげで起こる技術革新なり経営の効率化なりにより、原料：労働者が７５：２５で十分になるという現象です。この結果、失業する労働者（産業予備軍）が生まれ、低賃金でも働く労働者となり全体の賃金を押し下げます。

■過剰生産としての「恐慌」

　さて、労働者の賃金を切り詰めることでますます効率的な生産が可能になり、生産がどんどん増大して消費はどんどん減退することで、過剰生産という問題が発生します。もう誰も、作りすぎたパンを買ってくれません。こうなると、生産力があまりに大きすぎるが故に生産ができないという事態、「恐慌」が発生します。

　この問題を解決するために、マルクスは下図のように剰余価値を労働者に還元する社会を求めました。



　ところがしかし、１８７０年の「限界革命」により、「（限界）効用」の概念が誕生、新古典派経済学ができてしまいました。人によって好き嫌いがあって、「G　→　W　→　G’」はパンが嫌いな人から安く買ったパンをパンが好きな人に高く売りつけただけだというわけです。こうして「物の価値の増大」に対する新たな説明が生まれてしまい、「労働価値説」に代わる理論が誕生しました。

　こうなるともう「労働価値説」の存在意義がなくなってしまい、「労働価値説」はインチキだ、「剰余価値」が存在しなかったりマイナスになったりする場合はどうするんだ、とラッセルの批判を受けました。

◇資本主義の自己調整

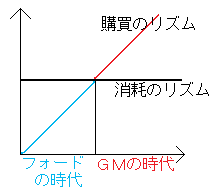
　労働者の賃金が減ることで消費が減ってしまうなら、労働者の賃金を増やしてやれば良いという話です。この話を理論化したケインズは、人が何かを買うために持っているお金の額、つまり消費に費やされる額を「有効需要」と呼びました。

　２０世紀初頭、ベルトコンベアー方式で大量のT型フォードを作ったフォードは「Welfare Capitalism」を唱え、１９１４年の社内改革で労働時間の短縮、賃金倍増、病気休暇や社内銀行の設置、私生活の改善策を行い労働者の待遇を良くしました。ウォールストリートジャーナルは「階級の裏切り者」、「大失敗をしでかした」、と非難しましたが、フォードは「ビジネスを始めた」と言い、「労働者の購買力増加により消費者を作り出したのだ」と反論しました。

　ニューディール政策をとるルーズベルト大統領は、ワグナー法を成立させ労働者を保護し、社会保障法も成立させました。この政策は古典派（新古典派も含む）の批判を浴びましたが、ケインズの支持を受け、有効需要の創出に成功して恐慌を脱しました。

　労働者に利潤の一部を還元することで、労働者の購買力も労働意欲も増した結果、フォーディズムと呼ばれる大量生産、大量消費体制ができました。

■消費社会の誕生

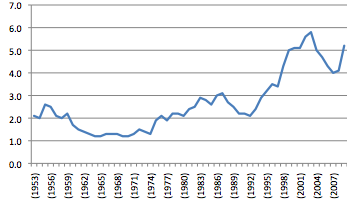
　しかし実際のところ、作れるだけ大量に作って買えるだけ大量に買う「フォーディズム」、「消費社会」を完成させたのは、フォード社ではなくGMでした。

　人間、「必要な物」には限りがあります。T型フォード車を１台買えば確かに生活が便利になったでしょうが、逆に言えば１台あれば十分で、（仮に）２０年ごとに買い替えれば不便を感じることは無いでしょう。ここに、「１家庭あたり２０年で１台」という、ある決まった「消耗のリズム」が存在します。

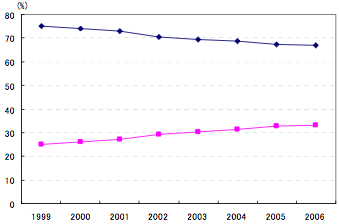
　GMは、多種多様な車を作り、ローンを組ませ、広告を大々的に行って、人々に「１５年ごとに買い替え」「１０年ごとに買い替え」させたわけです。これほど速いリズムの買い替えは、本来必要ありません。こうして、不必要な買い替えをさせることで更なる消費を創出したわけです。

　このように、実際に必要なリズムではなく、現実に消費を行うリズムが「購買のリズム」です。

　「購買のリズム」を速めようと無理な借金をし、無理な融資をした結果、慢性的な生産過剰となって世界恐慌に至りました。これに対し政策的に有効需要を創出し、いったんは遅くなった「購買のリズム」を再び速くしたのが、前述のニューディール政策です。

 なお、現在の日本では再び、労働者の圧迫とそれによる消費の減衰が起こっています。下図は、日本の完全失業率の推移です。

下図は、紺が正規雇用、ピンクが非正規雇用の割合です。

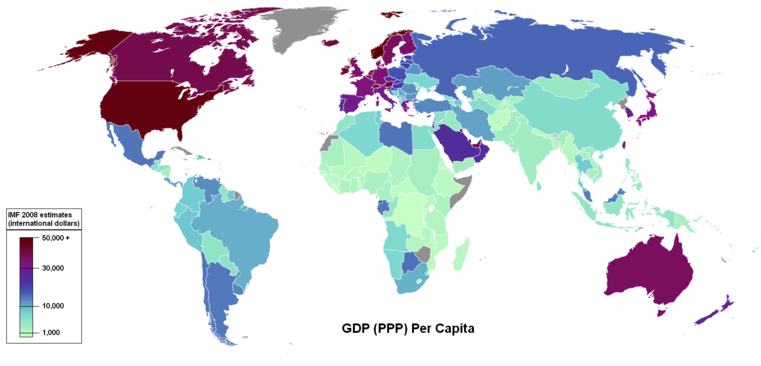


＃１２　グローバル化と資本主義

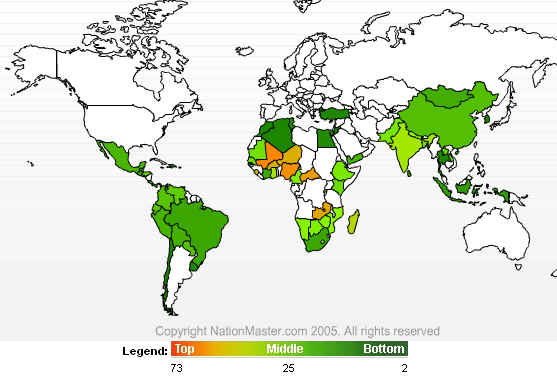
*Point.*

* ロストウは「いずれすべての国が近代的な高度大衆消費社会に成長する」と考えましたが、「先進国はずっと先進国、後進国はずっと後進国」「先進国の発展は後進国の衰退を伴う」という従属理論に批判され、さらに従属理論が発展して「世界全体でひとつの経済」という世界システム論が生まれました。

下図は、一人当たりGDPで色分けした世界地図です。



下図は、一日1ドル以下で暮らす人の割合を示した世界地図です。

◇２０世紀初頭の帝国主議論──Ｊ・Ａ・ホブスン（John A. Hobson, 1858-1940）

　ホブスンは、「帝国主義」を過剰な商品・資本の海外移転と定義し、恐慌を防ぐための新たな機制として、大企業が生産量を低めに調整して値段をつりあげる「独占」が生まれたと指摘、解決策として国内の貧困層に富を分け与えて消費を増進させる「社会改良」と、それにより帝国主義が必要なくなる「平和」を提唱しました。

◇経済成長の諸段階──Ｗ・Ｗ・ロストウ（Walt W. Rostow, 1916-2003）

　ロストウは、経済成長には以下のようなステップがあると考えました。

(1)伝統的社会

(2)経済成長への離陸

(3)成熟への前進

(4)高度大衆消費社会

そして、世界中のどの国も、西洋のように近代化を行っていずれは高度大衆消費社会になれると考えました。

◇批判──従属理論と世界システム論

■従属理論──「中核」（先進国）に従属する「周辺」（途上国）

　これに対し、「中核」（先進国）の工業発展は「周辺」（途上国）の産業を破壊(deindustrialization,奪工業化)し踏み台にすることで成り立っているという従属理論が批判を行いました。国々の順序付けは決まっていて変更できず。産業をどんどん破壊される「低開発」、先進国に都合のよい単一の原料のみを生産する「モノカルチャー」、原料を輸出し製品を輸入する「垂直型の貿易」から脱することは出来ないと主張します。

　さらに、「周辺」の賃金は「中核」より安くなっていき、低賃金で作られた原料が低価格で買い叩かれるという「不等価交換」も起こります。

　これらの論理は南部アフリカや南米の学者により展開されましたが、アミンらは社会主義経済を導入すればこの問題は解決すると考えていました。

■世界システム論──中核と周辺を媒介する「半周辺」

　ウォーラーステインは従属理論を発展させ、社会主義圏をも含んで、世界経済はただ一つの世界システムで成り立っていると指摘しました。そして、「中核」になろうとする、工業化の過程にある「半周辺」の存在を示し、「中核」と「周辺」だけの完全に固定的な二分法を否定しました。 　　文責：寺島